本質主義的信念と集団内尊重が外集団への態度に与える影響¹

○浅井暢子¹・大淵憲一²

(¹ 京都文教大学総合社会学部・² 東北大学大学院文学研究科)

キーワード：本質主義的信念、集団内尊重、態度

Impacts of Essentialist Beliefs and Intragroup Respect on outgroup Attitudes

Nobuko ASAI¹, Ken-ichi Ohbuchi²

(¹ Faculty of Social Relations Kyoto-Bunkyo Univ., ² Graduate School of Arts and Letters, Tohoku Univ.)

Key Words: essentialist belief, intragroup respect, attitude

目 的

社会的カテゴリーの多くは、人を理解する際に役立つ恣意的な分類として、社会的・文化的に構築されたものである。しかし、人々は、しばしばカテゴリー間の差異を「本質的」かつ「不変的」なものとして捉える (Rothbart & Taylor, 1992)。このような本質主義的な信念を外集団に抱いた場合には、その脅威を強く感じたり、偏見が向けられることがわかっている (e.g., Yzerbyt & Rocher, 2002; Haslam, Rothschild & Ernest, 2000)。本研究では、本質主義的信念と外集団への態度の関連に内集団成員からの尊重が与える影響を探索的に検討した。

内集団成員に尊重されているとの認知は、人々の所属欲求を充足し、集団における自らの価値の確証をもたらす (Spears, Ellemers, Doosje & Branscombe, 2005)。そのため、集団への同一視や集団間文脈の顕現化が生じ、集団奉仕的な認知や行動が導かれることが明らかになっている (Branscombe, Spears, Ellemers & Doosje, 2012; Jetten, Schmitt, Branscombe, McKimmie, 2005)。これらの知見は、内集団成員からの尊重が、外集団への否定的態度を助長することを示している。

しかしながら、内集団からの尊重は、別の心理的效果を持つことも期待できる。人々にとって内集団成員は、重要な社会的資源である (e.g., Correll & Park, 2005)。したがって、内集団成員から尊重されているとの認識は、社会的資源の利用可能性の知覚を高め、サポートの予期をもたらす。このような充実した内集団成員との関係性は、外集団に本質主義的信念を抱いている人々が感じる外集団脅威を軽減し、相手への態度を軟化させると予測できる (Jetten et al, 2005)。

本研究では、以上の議論に基づき、日本人の中国人に対する態度を取り上げ、本質主義的信念という集団間認知と内集団からの尊重という集団内認知の影響を調査から検証した。

方 法

調査方法 日本国内の9地区の選挙人名簿より計2700人を無作為抽出し、2011年6月に質問紙を郵送で配布した。回収数は、786であった (回収率29.1%; 男性: 355名、女性: 401名、不明: 30名; 平均年齢: 53.57歳; 範囲: 20歳-79歳)。

質問内容² (1) **本質主義的信念**: 中国人と日本人の差異の不変性及び本質の有無について評定を求めた (2項目, $\alpha=.41$; Haslam & Levy, 2006)。(2) **内集団尊重**: 他の内集団成員から自分が尊重されていると感じる程度を尋ねた (4項目, $\alpha=.84$; Deaux, Reid, Mizrahi, and Cotting, 1999; Jetten et al, 2005)。(3) **中国人への態度**: ①感情温度計 (0度: 非好意的 - 100度: 好意的) と②SD法を用いた態度尺度 (8項目, $\alpha=.82$) によって、中国人への態度を測定した。また、③初対面の中国人と接触した時に、不安を感じる程度についても尋ねた (Stephan & Stephan, 1985; 5項目, $\alpha=.80$)。感情温度計以外への回答は、6件法とした。また、質問紙では、年齢、性別、学歴、職業についても尋ねた。

結 果 と 考 察

感情温度計 ($M = 42.41$; $SD = 17.33$) と態度尺度得点 ($M = 3.15$; $SD = .72$)、集団間不安尺度得点 ($M = 3.88$; $SD = .78$) のそれぞれを従属変数とした、階層的重回帰分析を行った。Step1では、参加者の属性変数 (年齢、性別、学歴、職業) を説明変数として投入した。次に、Step2として本質主義的信念得点と内集団尊重得点を説明変数として投入したところ、すべての従属変数において、本質主義的信念の主効果が認められた (感情温度計: $\beta = -.51, p < .00$; 態度尺度: $\beta = -.58, p < .00$; 集団間不安: $\beta = .33, p < .00$; $\Delta R^2 s > .11, p < .00$)。このことは、中国人と日本人の差異を本質的で不変的なものとして捉えていた人ほど、中国人に否定的な態度を抱いていたことを示している。また、集団間不安に関しては、集団内尊重の主効果も認められ、尊重されているほど、中国人との接触に対する不安が低かった ($\beta = -.07, p = .05$)。さらに、Step3として、本質主義的信念得点と内集団尊重得点の交互作用項を投入したところ、集団間不安においてのみ有意傾向が認められた ($\beta = -.07, p = .052$; $\Delta R^2 = .01, p = .052$)。下位検定の結果、本質主義的信念が低い場合には、内集団尊重は集団間不安に影響を与えていないことが示された ($\beta = -.01, n.s.$)。一方、中国人に脅威を感じる程度が高いと考えられる本質主義的信念の持ち主であっても、他の日本人から尊重されていると感じているほど、中国人との関係構築に対する不安感が軽減されることがわかった ($\beta = -.12, p < .01$)。対人不安尺度でのみ、内集団尊重の効果が認められたのは、内集団成員という社会的資源の有無がより重要になるのが、脅威を感じる外集団と具体的ななかかわりを持つような状況であるためと考えられる。また、本研究では、内集団尊重が外集団への否定的態度を助長してはいないことが一貫して示された。内集団尊重が集団間関係に否定的効果を与えることを示した研究の多くは、独立変数として尊重の有無を操作しており、状況的な内集団尊重感を扱ったものと言える。一方、本研究で扱った内集団尊重は、これらと比較すると、特性的あるいは長期的なものと言える。このことが、本研究と先行研究の結果の差異を生じさせていた可能性がある。今後は、集団内尊重の質的側面にも着目する必要があるだろう。

¹ 本研究は、東北大学グローバル COE プログラム・社会階層と不平等教育研究拠点の支援を受けた。

² 本研究の目的と関連する質問項目のみを記載した。